## 「伝道の開始」（ルカ四章一四～三〇節）

### 1　イエスの宣教

ルカによる福音書は、ようやく今日の箇所から、イエスの宣教活動を語りはじめることになります。

「ようやく」というのは、ここまでこの福音書はイエスの誕生、その背景など、じつにていねいに書いてきたからです（その点ではマタイも同じ）。そのため私どももテオフィロ（一・三）と共に、周到な準備のもとに神の救いが始まったことを知ることもできたのです。

ご承知のようにイエスは、生涯にわたって、ナザレのイエスと呼ばれています（二四・一九）。生まれたのはユダヤの町ベツレヘム、お育ちになったのは、ガリラヤのナザレです。

三十歳のころガリラヤを出て、ヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けます。その後、ガリラヤに帰ってきます。郷里ガリラヤ、そこが活動の出発点であり、本拠地でした。

イエスは霊の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた（一四～一五節）。

福音書はここから、すなわち、イエスがガリラヤで宣教活動を開始したことから始めて、最後に弟子たちを祝福しながら、天に上げられる（二四・五一）までを書いています。

この間、短く考えて一年間、長くとっても三年間、イエスの活動した主な地域はガリラヤでした。他の地方にも行ってはいますが、多くありません。エルサレムには巡礼者として何度か行っています。そして最後の一週間は、言うまでもなくエルサレムで過ごします。そこで十字架につけられます。しかし三日後に甦って、それから四〇日の間、甦った体で多くの弟子にご自身を現されます。それが地上の最後の日々ということになります。

ヨルダン川の西側の地域、パレスチナ、当時の様子を少し説明すると、ユダヤとサマリア、そしてガリラヤ、三つに分かれていました。ガリラヤの広さは、正確な数字をいまもっていませんが、聖書地図で見ると、東西六〇キロ、南北に八〇キロぐらいですので、宮城県の半分ぐらいでしょうか。東側に大きな湖があります。ガリラヤ湖です。これは東西に一三キロ、南北に二一キロの湖です。広さでいうと、猪苗代湖の一・五倍ぐらい。湖の西側のほうが開けていたようです。そこにカファルナウム、ティベリアスといった町がありました。このカファルナウムがとくにイエスと関係の深い町です（二三節）。そこに住んで活動していたようです。

いまお読みした箇所に、「イエスは諸会堂で教え」という言葉がありました。イエスのガリラヤでの活動を表す言葉として、ときに三つの動詞が上げられることがあります。

三つの動詞というのは「教える」「宣べ伝える」、そして「癒やす」です。「宣べ

伝える」という言葉も、じつは今日の聖書箇所でも使われていて、一八と一九節で「告げ」「告げる」と訳されています。例えば前線から遣わされた伝令が戦いの勝利を民衆に「告げる」というときにも使われます。「宣べ伝える」のほか、告知、宣言、あるいは説教と訳されてよい場合もあります。「教える」と「宣べ伝える」、どちらも言葉による活動です。それに対し「癒やし」は身体的、物理的です。癒やしの記事が今日の箇所の直後から多く出てきます。教える、宣べ伝える、癒やす、これらの言葉で表される活動がイエスのしていたことだったのです。

それならイエスはどこで教え・宣べ伝え・癒やしをしていたのでしょうか。場所を選ばないというのが、さし当たりの答えかも知れません。安息日は会堂に行っています。それ以外は、たとえば個人の家であったり、野外であったりしました。ガリラヤ湖のほとり、町の中、通り、山の上で説教もしています。評判は、しかしガリラヤの国境を越え、ユダヤも越えて「シリア中に広まった」（マタイ四・二四、ルカ六・一七）とあります。

それでは、そうしたイエスの活動の中心、彼自身が使命としたことは何であったのでしょうか。（この章の終わりに、こうあります）。

イエスは言われた。「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ」（四・四三）。

神の国、それがキーワードです。神の国、それは、一つの領域、どこか特別の場所のことではありません。神の国とは神の支配のこと、その現実と力のことです。旧約聖書はこの神の支配は世の終わりに来るものと考えていました。しかしイエスは、そう考えてはいませんでした。神の支配は、いま、ここで、なっている、それをイエスは告知し、教え、それが現実になっていることを、まさに癒やしをもって明らかにしたのです（七・二一以下）。その神の国の現実を、私どもの人間的な現実を支配するもう一つの現実として示したのです。

## 2　会堂で教え

マタイ及びマルコによる福音書は、ガリラヤでイエスの伝道活動のほとんど最初のところで弟子の召命のことを記しています。しかしルカは会堂での教えから始めています。

イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目に留まった（一六～一七節）。

イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた（二〇節）。

この時読み上げられた聖書の言葉を、いまは読まず、飛ばししました。後で取り上げることにします。

安息日というのは、ご承知のように、七曜では土曜日に当たります。神が六日間で天地万物をつくり、七日目に休んだことにちなんで、人も七日目に仕事を休み、その日神を礼拝すると定められていました。十戒の第四の戒め、ユダヤ教徒の間ではもっとも重要視されていた掟です。

会堂、これもご承知のことと思いますが、ユダヤ教の礼拝堂です。シナゴーグと言います。集会場という意味です。イスラエルでは、神殿というのはエルサレムに一つしかありません。地方の各都市には、シナゴーグというのがつくられ、そこで礼拝がなされていたのです。礼拝だけでなく、時にはそこで裁判が行われ、子供の学校のような役割も果たしていました。ユダヤ人が住んでいるところではなくてならない施設であったのです。それを管理する人が、聖書のところどころに出てくる「会堂長」（口語、会堂司）です。その中でイエスを信じるようになった人も、少なからず出てきたことは、福音書に書いてあります。今日の箇所で、イエスが受けとった巻物を「係の者に」（二〇節）返す場面がありますが、これも会堂長の役割だったのかは、いまは私には分かりません。

ここに「いつものとおり」という言葉があります。イエスの敬虔な日常生活が垣間見られます。安息日ごとに行く礼拝の場は、結果的に、イエスにとって、重要な宣教の場ともなったのです。

シナゴーグの礼拝の中心は聖書朗読とそれにつづく説教にありました。律法や預言者が読み上げられたのです。イエスはそれを説き明かします。ただこれはだれもがすることができたようです。今日の箇所から受ける印象ではイエスは会堂礼拝に来るたびに語っていて、そこに居合わせた人々は、いつもイエスの言うことにはりつめた思いで耳を傾けていたようです。読み上げられた聖書、つづいてなされたイエスの説き明かしはこうです。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、囚われている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（一八～一九節）。

そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか」（二一～二二節）。

イザヤ書からの朗読です。イザヤの巻物は渡されたのであって、彼が取ってきたのではありません。イザヤのこの箇所を読み上げたのはイエスです。イザヤの預言の言葉を取り上げてイエスは、ここで語られていることは、まさに自分において現実となった、成就した、出来事となっていま起こっていると語ったのです。この神の国の現実を、私どももはっきり知らなければなりません。

## 3　ナザレを去る

さて福音書、とりわけ、いま私どもが改めて取り上げはじめた、イエスのガリラヤ

における宣教活動を読むたびに感じることは、いわゆる宗教というもののもっている、宗教というものの提供するものと、イエスがもたらそうとする福音が、どれほど違うのかということです。宗教と福音の違いです。

宗教という言い方をしたとき、私どもは、しばしば人間を、心の部分と体の部分に分けて物事を考えがちです。つまり、宗教というのは、あるいは信心というのは心の部分に関わる、私どもの心が安心する、心の平安を得る、そういうものだと考えるのです。

もう一つ宗教はこの世とあの世とを区別して考えることもします。宗教はこの世のことではなく、あの世に関わること、彼岸に希望をもつことなのだと、私どもは考えがちです。

しかし福音書のイエスは、そうした考えをしていないように見えます。心と体に分けて、心の安心を提供しようというのではないのです。この世とあの世を分けて、あの世に希望があると語るのではないのです。そうではなくてイエスが語るのは、いまここで、囚われている人に解放が与えられることです。いまここで目の見えない人に視力の回復が告げられることです。いまここで圧迫されている人が自由にされることです。

引用されたイザヤ書は、こうした囚われている人、目の見えない人、そして抑圧されている人を、まとめて「貧しい人」と呼んでいます。彼らに福音が告げ知らされるのだと。

貧しい人とは助けなき人です。神にしか助けを求めることのできない人です。そのかぎりで彼らはまた敬虔な者たちです。この貧しい者たちを助け、引き上げ、神の子とし、生きるようにすること、これが神の国の福音の宣教です。神の国の軸はそのようにして貧しい人へ傾いているのです。

こうしたイエスの説教を、「皆・・・ほめ」た、とあります。しかしたんに「驚いた」ともあります。そしてこの驚きは「この人はヨセフの子ではないか」という疑いも招いたとあります。本当のところ、どういうようにナザレの人たちは受けとったのでしょうか。最後のところを見ると、結局はイエスの言葉に、「皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し・・・山の崖まで連れて行き、突き落とそうとしたのです」（二八～二九節）。

イエスが昔の預言者エリヤとエリシャの故事を引き合いに出したことが、火に油を注いだようです。

紀元前九世紀、イスラエルの南北朝時代、北王国です。大飢饉があったとき、預言者エリヤが遣わされたのは、異邦の女、「シドン地方のサレプタのやもめ」（列王上一七章）でした。エリヤの弟子エリシャのとき、ライ病がはやって、ただ一人清くされたのはシリア人ナアマンでした。神のこうした民族を越えた救いの広がりは、このときユダヤ人には受け入れられないことでした。神の国は、貧しい人に傾斜しています。それがユダヤ人かどうか、ここでは問題になりません。だれもが、すべての貧しい人が、神の恵みを受けるのです。イエスはナザレを去ります。そしてついにそこに戻ってくることはありませんでした。

（二〇二一・一・一七）